

動詞時制から見た物語の多元的構成

—「語り」時制／「説明」時制の局所的交替が生み出すテキスト効果—

西 村 淳 子

序

フランス語の動詞時制の体系は、要素数の限られた「閉じた体系」を成している¹。形態的には極めて限定された要素数しか持たない体系であるが、その価値は幅広く、実際の使用における価値は、具体的なテキストの中でしか決まらない。動詞の時制がどんな価値をもちうるかという問題は、伝統文法においても、また、言語学においても膨大な記述がなされてきた。しかし、テキストにおいて、時制が他のどのような要素と関係をもち、可能な価値のうちの一つを実現させるのかという問題は、個々の解釈活動に委ねられ、体系的な研究は多くはない。ところが、近年になって盛んになって来た語用論^{フラグマティクス}やテキスト言語学、発話行為理論などは、言語手段の使用の仕方にも一定の規則性が認められ、そこになんらかの秩序が働いていることを指摘している。これが言語の潜在的価値と個々の使用の間に位置する言語の使用法である。言語の使用法をどのような形で提示することができるかについては、意見の分れるところであるが、筆者は、現段階における一つの可能性は、規則という形ではなく、類型的な提示であると考えている。過度な一般化は使用法の現実のあり方を歪めるものであり、

1 近未来や近過去、また être en train de などの迂言法を含めるか否かで、この体系に属する要素数は異なるが、いずれにせよ、名詞、動詞などに比較すると極めて限定された要素から成る閉じた体系を成している。

単なる個別現象の記述は、説明としての価値をもたないからである。このような立場から、本稿は、動詞時制に内在する一つの対立がどのように使用されるのかを典型的に提示することを第一の目的とする。

ここで考察の対象とする動詞時制の対立とは、バンヴェニストが複合過去／単純過去の対立に見出し、「談話」discours／「歴史」histoireと呼んだものである²。「談話」とは「人が事実を目撃者として、関係者として詳述する」言葉であり、「歴史」は、話者の世界とは直接繋がらない「過去の出来事を物語る」言葉である。バンヴェニストはこの対立がフランス語の動詞時制の体系の一つの分類原理になっていることを示した。のちにこの時制価値の対立が、フランス語のみならず、ドイツ語をはじめ多くのヨーロッパ語にも存在することを示し、文学テキストにおけるその使用法を論じたのは、H. ヴァインリヒである³。彼は、これを、「説明」（バンヴェニストの用語では「談話」）／「語り」（「歴史」）と呼び、広大な範囲の文学作品を分析して、テキスト言語学という新しい研究領域を開拓した。しかし、その理論的可能性は大きく、「説明」／「語り」の問題だけに限定しても、ヴァインリヒ自身そこから引き出しうる理論的成果を十分に汲み尽くしたとはいえない。複合過去と単純過去の使い分けは現代フランス

2 BENVENISTE, E.: "Les relations de temps dans le verbe français", *Problèmes de linguistique générale*, Gallimard, 1966, pp.237-250. 【一般言語学の諸問題】、川村正夫他訳、みすず書房、1966年。

3 WEINRICH, H.: *Tempus, Besprochene und erzählte Welt*, W. Kohlhammer GmbH, 1971. 【時制論】、脇阪豊、大瀧敏夫、竹島俊之、原野昇訳、紀伊國屋書店、1982年。 *Le Temps*, Traduit par Michèle LACOSTE, Seuil, Paris, 1973.

4 VASSANT, A.: "Ambiguïtés et mésaventures d'une théorie linguistique: Les relations de temps dans le verbe français d'E. Benveniste", in *l'Information Grammaticale*, 9, pp.13-19, 1981.

ヴァッサンは、複合過去と単純過去とは現代フランス語では、相補分布（使い分けがある）ではなく、自由変異を成している（使い分けがない）と主張している。たしかにこの主張の根拠に挙げている「星の王子さま」の一節では、一見「説明」時制と「語り」時制が無秩序に混在しているかに見える。しかし、作品全体の時制構成を考慮すると、この部分は、語り手の体験談としての「説明」時制から、王子さまの虚構の世界を表す「語り」時制へと移行していく接点にあたる。つまり、語り手が、「本当らしい」話し方から、「お伽話しのような」話し方へと移行しつつある部分なのである。このことは、物語の局部だけを見ても分らないが、語り手の幼少時代を語る第一章に単純過去は現れず、二つの世界が重なり合う第二章で38%（複合過去と単純過去の混在の例はこの章で見られる）、「語り」の世界に入る第三章では56%の動詞が単純過去になっていることから明らかである。（SAINT-EXUPÉRY, A.: *Le Petit Prince*, Gallimard, 1970.）

語にはないという主張⁴が現在もなされるのは、それゆえではないだろう。筆者は、すでに、この時制上の対立がフランス語の物語テキストにおいて、テキストの全体構成（マクロ構成）に大きく貢献していることを示した⁵。本稿では、この対立が物語のどの部分に現れるかということとは関係なく、記述内容や前後の文脈との関係で、テキスト構成にどのように関わるのか（ミクロ現象）を分析する。本稿の第二の目的は、これによって、「説明」時制／「語り」時制という対立が現代のテキストにおいてもけっして自由変異をなしているわけではないことを示すことにある。また、これをテキストの側から見ると、特定の言語手段が生み出す多元的構成と多様な効果を明らかにすることにもなるであろう。

1. 「説明」時制と「語り」時制

バンヴェニストの「談話」／「歴史」とヴァインリヒの「説明」／「語り」は、ほぼ同義と考えてもよいものであろう。バンヴェニストが話者の発話行為とそれを表す言表のタイプという観点から論じたのに対し、ヴァインリヒは、時制の記号的価値、すなわち、動詞の表す概念に対して話者のとる態度という角度から捉え、発話態度の問題と位置付けた。同じ現象を、話者の行為、言表のタイプ、記号の価値という三つの観点から見ることは常に可能である。また、「談話」や「歴史」という用語が、言語学において他の意味でも用いられ、誤解を生みやすいので、ここでは「説明」と「語り」という用語を用いる。筆者は、記号的価値としては、発話態度は、モード（叙法）の問題であり、名詞や動詞（語幹）の表すような概念的な次元にあるものではなく、直示詞 *deixis* などと同様、話者の現在の言語行為に関わる指示であると考え、「説明」時制が表すのは、出来事が話者の世界の延長にあることであり、「語り」時制は話者の世界とは断

5 西村淳子：「動詞時制から見たテキスト構成の手法—「説明」時制、「語り」時制の分布と物語の全体構成—」、武蔵大学人文学会雑誌，第30巻，第2・3号，1999年。

絶した世界に属することを示す。伝統文法では、動詞の価値体系において、不定法／命令法／直説法／条件法／接続法という対立しか認めていないが、直説法のなかに、いわば「説明」と「語り」の二つの発話態度があるのである。「説明」の時制は、現在、複合過去、単純未来、前未来であり、「語り」時制は、単純過去と前過去である。相互に排他的なのがこれらの時制だからである。ところが他方で、テキストの側から見ると、別の分類もできる。ヴァインリヒは、単純過去と前過去のほか、半過去、大過去、条件法現在、条件法過去を「語り」時制に含めている⁶。それは、「語り」のテキストの時制構成を見ると、この四つの時制も重要な働きをしていることが認められるからである⁷。テキストにおいては、一旦「語り」、あるいは「説明」のどちらかの発話態度が示されると、この効力は次に別の発話態度が示されるまで持続する。したがって、この四つの時制は積極的に語りの態度を標示しないが、語りの世界の出来事を表現し続けるのである。一方、命令法は、聞き手への働きかけを表すので、「説明」時制と共通の世界に関与するが、すでに実現した事態の「説明」とは異なり、事態の実現を相手に要請する「命令」という態度を表す。接続法、不定法は、動詞の表す概念が話者の世界はもちろんのこと、どんな世界にも位置付けられない可能的なあり方を示すだけなので、単独では話者の発話行為を構成しない。テキストの時制構成の分析にあたってこれらの考察を整理すると、時制は次のように分類できる。

「説明」時制：直説法現在、複合過去、単純未来、前未来

「語り」時制：直説法単純過去、前過去

準「語り」時制：直説法半過去、大過去、条件法現在、条件法過去

その他：命令法、接続法、不定法

6 ヴァインリヒ、*Op. Cit.*, pp.37-69, p.498.

7 半過去は「語り」のテキストにおいて、(前景となる筋を描く単純過去に対して)背景を担う。大過去は、語りのテキストにおける回顧時制であり、条件法現在は予見時制、条件法過去は予見と回顧の両方が組み合わされた時制として働く。(ヴァインリヒ、*Op. Cit.*, pp.70-82)

2. 分析の手続き

分析の対象には、十数編の短編小説を用いた⁸が、作品の文学的価値を問題にするわけではない。このジャンルの言葉が、動詞時制の表す「語り」／「説明」という発話態度の対立の可能性を駆使している言語使用の代表的なものだからである。物語のなかには、「説明」時制のみで書かれた作品もないわけではないが、ほとんどの作品が「語り」時制を用いている⁹。また、「語り」時制中心に描かれた作品にも「説明」時制が全く使われない場合はほとんどない。むしろ、物語は「語り」時制と「説明」時制の対立を利用し、作品に膨らみを与えている。そこで、ここでは、「説明」／「語り」の対立が最大限に利用されていると考えられる「語り」時制中心の作品を対象に分析を行う。

分析は、次の手順で行う。

- i. 各作品において継起する動詞の時制を記述する、
- ii. 発話態度が異質的に移行する場所（「語り」から「説明」へ、または、「説明」から「語り」へ）を特定する、
- iii. 時制の対立が生み出す効果によって、特定された例を分類し、時制の潜在的な価値（話者の世界との関係）とそのテキストの効果、および、それを実現するテキスト環境を考察する。

分析した作品の数は少ないが、分類範疇は、発話態度が「語り」から「説明」へと移行する例を網羅的に考慮した結果である。以下に挙げる例は、実際の分析結果の一部に過ぎない。

8 分析作品は、文献表を参照。

9 西村淳子：Op. Cit., pp.46-51。

3. 物語の全体構成に関わる時制の交替と局所的交替

上のような手続きで言語資料^{コーパス}を検討してみると、時制が異質的に交替する場合は大きく二つに分けられることがわかる。一つは、場面単位の大きなまとまりが、全体のなかで意味のある位置（例えば冒頭や末尾、または、特定の人物やテーマを描く場面など）に生じる場合である。もう一つは、物語全体のどの位置にあるかにはかかわらず、各動詞単位に交替が起こる場合である。我々の先の分析の結果では、前者の場合、時制の対立は、物語の展開するテキスト世界を質的に異なる複数の世界に描き分けることに貢献していることが明らかになっている¹⁰。その対立は、話者の世界から分断された「語り」世界の閉鎖性／「説明」世界の開放性という点にあることもあれば、「語り」世界の出来事に対する解釈の方向を「説明」世界が教訓として示すこともある。また、物語を実話風に「説明」時制が導入し、連続的に虚構的「語り」へと誘い込むこともある。これらの手法はすでに考察したので、本稿では、局所的に時制の異質な移行が生じる場合に焦点を絞って検討する。

局所的な時制の交替には、「語り」時制の文脈に「説明」時制が現れる場合と「説明」時制の文脈に「語り」時制が現れる場合の二種類を想定することができる。しかし、我々の分析した言語資料^{コーパス}に後者はほとんど認められない。言い換えると、「語り」の途中で「説明」が挿入されることは多いが、「説明」の途中で「語り」が単独で現れることはほとんどないということである。これは、「説明」時制の表す世界と「語り」時制の世界の非対称的性格をよく表している。なぜなら、「説明」世界＝話者の世界は、話し手、聞き手にとって既知の世界であるが、話し手の世界から分離した「語り」世界は、歴史記述の場合のように現実の時間や場所に結びつけない限り未知の世界であり、テキストを通してはじめて構築される世界

10 西村淳子：Op. Cit.

だからである。物語という虚構テキストの中で、単独の動詞や文でこの役割を果たすことは難しいので、単純過去などの「語り」時制は通常まとまりとして現れる傾向があるのである。

4. 「語り」の文脈における「説明」の役割

そこで、物語の「語り」時制中心に描かれた部分に「説明」時制が介入する場合は、大きくタイプ別に列挙してみると次のようになる。

I. 語り手の介入

I. 1. 語り手の判断

I. 2. 語り手の世界と連続した事柄

II. 特定の時空に位置付けられない命題：普遍的真理、一般的命題

III. 登場人物の言葉：直接話法

IV. 様態を表す従属節

V. 聞き手への働きかけ

VI. テキスト構成を表す要素：メタ・テキスト的要素

VII. 歴史的現在

I. 語り手の介入

物語には、発話者の存在がほとんど表面に現れないもの（「ココ」, 「アムステルダムの水夫」, 「オリヴィエのほら」, 「初雪」, 「絵画の伝説」, 「パンの伝説」, 「香りの伝説」）もあれば、「語り手」が明確に設定されているものもある。また、設定された「語り手」が物語の主人公になる場合もあれば（「乙女の告白」）, 別にいる主人公を描くためのきっかけとなるもの（「ドリー」, 「木を植えた男」, 「絵画の伝説」など）, あるいは、登場人物や出来事とは一線を画して、伝達の役割を果たすだけのために登場するもの（「アルルの女」, 「マダム・ダルジャン」）などがある。どんな言葉にも話し手が存在することはいうまでもないが、「語り」とは、語られる出来

事が話者の世界とは直結しないことを示す発話態度である。したがって、語りのテキストは、実際の発話者、すなわち作家に直結するわけではない。設定された「語り手」が作家自身とも虚構の「語り手」とも解せるもの（「木を植えた男」など）もあれば、虚構であることが明白な場合（プルーストの「乙女の告白」の語り手は女性である）もある。このように、物語における話者の現れ方や、その役割は様々であるが、いずれにせよ、語り手が物語に介入するとき、しばしば、「語り」時制から「説明」時制への移行が見られる。

I. 1. 語り手の判断

基本的に物語は一連の出来事を時間軸に沿って描くが、語られる出来事に対して語り手が判断を加える場合がある。そのような場合に「語り」時制は「説明」時制へと移行する。

(1) Je mis(単純過去), **je crois**(現在), assez d'insistance dans mes questions puisqu'il y répondit(単純過去). (GIONO, J.: *l'Homme qui plantait des arbres*, p.20.) (148-150/416)¹¹

いま思えば私は根掘り葉掘り質問したのにちがいない、答えてもらえたのだから¹²

「木を植えた男」では語り手の「私」の体験として主人公との出会いが語られる。したがって、「私」は、ときには出来事（主人公との出会い）の語り手として、ときには出来事の体験者としてテキストに現れる。そしてそこでは、出来事の渦中にある「私」の行為（je mis）は、単純過去すなわち「語り」時制で描かれ、「語り手」としての判断（je crois）は現在

11 作品における引用部分の位置を示すため、a. 冒頭から数えた動詞の番号と b. 作品中の動詞総数を (a/b) で表した。例えば、(148-150/416) は、例に挙げられた文に含まれる動詞が、冒頭から数えて148-150番目にあり、作品の動詞総数が416であることを意味する。これによって、引用部分が作品のどの部分にあるのかおよその位置が分かる。以下同様。

12 高畑勲（訳著）：『木を植えた男を読む』、徳間書店、1990年、p.71。

時制（「説明」時制）で述べられる。こうして、物語という言語行為の主体となる「語り手」の判断が語られる客体である出来事の世界と区別されるのである。

語り手の判断は、「私」という形をとるとは限らない。

(2) Cet homme parlait (半過去) peu. C'est (現在) le fait des solitaires, mais on le sentait (半過去) sûr de lui et confiant dans cette assurance. (GIONO, J.: *Op. Cit.*, p.12.) (41-42/416)

男はほとんどしゃべらなかつた。それは孤独に生きる人にありがちなことである。しかし男からは、みずからを恃む気概と、その自信による落ち着きを感じられた。¹³

(3) A minuit, on alla (単純過去) se coucher. Tout le monde avait (半過去) besoin de dormir... Jan ne dort pas. (単純過去) lui. Cadet a raconté (複合過去) depuis que toute la nuit il avait sangloté (大過去) .. Ah! je vous répons (現在) qu'il était bien mordu (大過去), celui-là...

Le lendemain, à l'aube, la mère entendit (単純過去) quelqu'un traverser sa chambre en courant. (DAUDET, A.: *Arlésienne, Lettres de mon Moulin*, p.67) (126-133/157)

真夜中に人々は寢床へ行った。みんなねむかつた…しかしジャンは眠らなかつた。あとで弟は、一晩じゅうジャンがすすり泣きをしていたと話した…… ああ、どんなに苦しんだことだろう…翌日、明けがたに、母親はだれかが自分の部屋を走り抜けるのを聞いた。¹⁴

13 高畑勲訳, *Op. Cit.*, p.68.

14 桜田佐訳, 『風車小屋だより』, 岩波書店, 1974年, pp.50-51.

「語り手の判断」／「語られた世界」という対立が「説明」時制／「語り」時制という対立によって表されるのは単に、時間的な差異（テンス）の問題ではない。上の例では、判断の根拠となる過去の出来事（*Cadet a raconté*）は、複合過去という現在以外の「説明」時制で表されている。複合過去も単純過去も成立してしまった事態を表すという意味で過去には違いないが、単純過去に置かれた *on alla se coucher*（人々は寢床へ行った）や *Jan ne dormit pas, lui*（ジャンは眠らなかった）と連続した時空に位置付けられる出来事ではない。そのことが、「説明」時制／「語り」時制という対立によって示されているのである。

I. 2. 語り手の世界と連続した事柄

「語り」時制で描かれる事柄は、本質的に話者の世界とは隔絶した世界に属する。しかし、出来事を構成するすべての要素が話者の世界から切り離されているとは限らない。たとえ「語り」世界の構成要素であっても、話者の世界と共通する出来事は現在時制を中心とする「説明」時制で表現される。

(4) Puis en 1927 Lanvin fit (単純過去) rouler à nos pieds une boule noire et dorée, celle-là même qu'Adam avait ramassée (大過去) sur une plage, et qui **s'appelle** (現在) ARPÈGE. (TOURNIER, M.: La Légende des parfums, *Le médianoche amoureux*, p.292) (131-133/144)

つぎに、1927年、ランバンが黒色と金色の縞模様の球をわれわれの足元ところがしたが、これはかつてアダムが浜辺で拾ったのと同じもので、この香水の銘は『アルページュ』という。¹⁵

15 榎原晃三訳、『愛を語る夜の宴』, p.18.

主節が単純過去であるにもかかわらず、従属節が直説法現在になっているのは、この従属節の内容が物語の構成要素であると同時に、話者の現在にも通じる内容だからである。

(5) J'allai (単純過去) de nouveau me joindre aux chevaliers de l'arc, prenant place dans la compagnie dont j'avais fait (大過去) partie déjà. Des jeunes gens appartenant aux vieilles familles qui possèdent (現在) encore là plusieurs de ces châteaux perdus dans les forêts, qui ont plus souffert (複合過去) du temps que des révolutions, avaient organisé (大過去) la fête. (NERVAL, G.: *Sylvie, Les filles du feu*, p. 139) (267-271/1298)

その時も、すでに以前にも加わったことのある弓の騎士の集いに入れてもらいに行ったのだ。そのあたりには、革命のせいもあるがそれよりも歳月の力によっていたんでしまった城館が森にかくれてたくさん残っているのだが、今だにそれらを所有しているいくつかの旧家の若者たちがこの祭典の企画と世話をしたのだた。¹⁶

例(5)においても、文脈 (J'allai) が単純過去であり、主節も大過去 (avaient organisé) であるにもかかわらず、時制の一致はされていない。ブリュノも指摘したように、時制の一致は破られることの多い規則である¹⁷。しかし、一致は気紛れに破られるのではない。テキストの中で、それぞれの事象が位置付けられる世界の広がりや性質が異なるのである。また、ここでも、現在時制のみならず、結果相を表す複合過去 (qui ont plus souffert) が使用されている。

16 入沢康夫訳、「シルヴィー」, 『フランス短篇24』, pp.71-72.

17 「従属節の時制を導くのは、主節ではなく、意味である。時制の一致の章は一行ですむ。すなわち、一致はない。」(F. BRUNOT, *La pensée et la langue*, p.782)

II. 特定の時空に位置付けられない命題：普遍的真理，一般的命題

現在時制が普遍的真理を表すために用いられることはいうまでもないが、普遍的でなくとも、特定の時空に位置付けられない一般的な事柄も現在時制で表される。このような現在時制は、特定の時空に位置付けられない事柄であるから、当然時間的価値を持たず、「汎時間的現在」présent “pan-temporel”（カーン）¹⁸、「時間の外にある現在」présent “hors du temps”（ブリュノ）¹⁹、「非時間的現在」“présent atemporel”（マルゾー）²⁰などと呼ばれている²¹。

(6) Plus tard, l'absence porta (単純過去) d'autres enseignements plus amers encore qu'on s'habitue (現在) à l'absence, que c'est (現在) la plus grande diminution de soi-même, la plus humiliante souffrance de sentir qu'on n'en souffre (現在) plus. (PROUST, M.: La confession d'une jeune fille, *Les plaisirs et les jours*, p.141) (125-128/465)

のちになって、不在はもつとずっと苦い別の教訓を与えてくれました。それは、人が不在に慣れてしまうということです。もう不在に苦しんでいない、と感じると、自分自身がひどくちっぽけなものに思われ、この上もなく恥かしい苦痛を覚える、という教えです。²²

(7) Je regagnai (単純過去) mon lit et je ne pus (単純過去) y trouver le repos. Plongé dans une demi-somnolence, toute ma jeunesse repassait (半過去) en mes souvenirs. Cet état, où l'esprit

18 KAHN, F.: *Le système des temps de l'indicatif*, 1984, p.65.

19 BRUNOT, F.: *Op. Cit.*, 1965, p.435.

20 MAROUZEAU, *Lexique de la terminologie linguistique*, 1969, p.185.

21 TOURATIER, C.: *Le système verbal français*, Armand Colin, 1996, p.77.

22 鈴木道彦訳、「乙女の告白」、『フランス短篇24』, p.143.

résiste (現在) encore aux bizarres combinaisons du songe, permet (現在) souvent de voir se presser en quelques minutes les tableaux les plus saillants d'une longue période de la vie. (NERVAL, G.: *Op. Cit.*, p.133) (130-131/1298)

帰ってベッドに入ったのだが、安らぎは得られなかった。夢うつつの境でうとうとしていると、幼い頃のすべてが記憶のうちを去来するのだった。こんなふうに、まだ眠り切っていない精神が、いろいろな形の奇怪に結び合わさった夢の世界が形成されるのをさまたげている状態にひたっていると、長い一生のうちでも特にきわだったいくつかの場面が、わずか数分間のうちに、次々と生起していくのが見られるものである。²³

(8) J'avais vu (大過去) mourir trop de monde pendant cinq ans pour ne pas imaginer facilement la mort d'Elzéard Bouffier, d'autant que, lorsqu'on en a (現在) vingt, on considère (現在) les hommes de cinquante comme des vieillards à qui il ne reste (現在) plus qu'à mourir. Il n'était (半過去) pas mort. (GIONO, J.: *Op. Cit.*, p.27) (204-208/416)

5年の間、あまりに多くの人々が死ぬのを見てきたので、エルゼール・ブッフイエも死んだにちがいない、と私は思わずにはいられなかった。それに人は20歳のころ、50歳の人間を、もはや死ぬことしか残されていない老人のように考えるものだ。彼は死んでいなかった。²⁴

下線部の内容が特定の事実を表すものではなく、一般的な命題であることは、onの使用やsouventなど反復性を表す副詞によっても明らかであ

23 入沢康夫訳, *Op. Cit.*, pp.67-68.

24 高畑勲訳, *Op. Cit.*, p.73.

る。

しかし、そのことにもまして、「語り」時制の文脈のなかで、これらの命題が、現在時制と同様反復的アスペクトをもつ「語り」時制の半過去ではなく、「説明」時制である現在時制によって述べられていることが、それぞれの語りの世界にのみ有効な事柄ではなく、より広い我々の世界にも共通する事柄として一般性、普遍性を高めているのである。

Ⅲ. 登場人物の言葉：直接話法

「語り」時制の文脈に「説明」時制が介入するもっとも大きな要因は、直接話法である。直接話法は、登場人物の言葉や思索を表す。「語り」部分も直接話法も、物語の世界に関わるが、「語り」は世界の外からこれを描き、直接話法は、この世界の内にいる登場人物の観点からこれに関わる。登場人物は、物語の世界に住み、この世界に繋がる言葉によって、語りの世界に働きかけたり、この世界について考えたりする。したがって、通常、話者（＝登場人物）の世界に繋がる「説明」時制が用いられる²⁵。すでに見たように語り手の言葉も「説明」時制が用いられるが²⁶、語り手の言葉の「説明」時制は、物語の外の世界に繋がるのに対して、登場人物の言葉の「説明」時制は物語の世界に繋がる。したがって、直接話法は、語り手の介入する場合とは違い、物語に外の世界を導入するのではなく、物語の世界に留まりつつ、「語り」とは異なる、内側からの観点を導入するのである。直接話法の頻度は、作品によっても異なるが、一般的に非常に高く、「語り」の文脈における「説明」時制の大部分を占めるほどである。したがって、その効果は多様であるが、総じていうと、言葉や思索という世界

25 登場人物が、その言葉のなかで、「語り」時制を用いることもないわけではない。しかし、その場合、登場人物は、別の次元の物語の語り手という役割を果たすことになる。つまり、物語は、もう一つの物語をその中に含む入れ子構造になる。"Je lisais (半過去) un de tes livres: cette phrase de Mme de Rouget me **saut**a (単純過去) aux yeux...." (BERNANOS, "Madame Dargent", *Bernanos IV*, p.282) (178-179/447) 「あたしはあなたの作品の一つを読んでいた、するとルージェ夫人のあの台詞が目にとまったの」(三輪秀彦訳, 「ダルジャン夫人」『フランス短篇24』, p.251)

26 4. I. 語り手の介入 参照。

への主体的な関わりにおける登場人物の観点を明らかにすると同時に、読者を言葉や思索の解釈者として物語世界の延長上に置くということが考えられる。逆に直接話法が使われない場合を考えてみよう。モーパッサンの「ココ」²⁷には、直接話法は極めて少なく、馬番の少年が老いた馬を餓死させる経緯が淡々と描写される。作品を通じて、「語り」時制が用いられ、物語を見る観点は一貫して物語世界の外にある。そのために、この物語は常に登場人物との距離をおく冷静さと平淡さを感じさせる。また、「木を植えた男」において、主人公（エルゼアール・ブフィエ）の言葉が直接話法によって表現されることはほとんどない（例（9）の *Cinquante-cinq* が唯一の場合である）。語り手が主人公から聞いたわずかな内容も、語り手の観点から間接的に表される。

(9) Il avait (半過去) visiblement plus de cinquante ans. Cinquante-cinq, me dit (単純過去) -il. Il s'appelait (半過去) Elzéard Bouffier. Il avait possédé (大過去) une ferme dans les plaines. Il y avait réalisé (大過去) sa vie. Il avait perdu (大過去) son fils unique, puis sa femme. (GIONO, J.: *Op. Cit.*, pp.21-22) (161-166/416)
あきらかに50歳はこえていた。55歳だと男は言った。エルゼアール・ブフィエという名前だった。もともと彼は平野部に農場を所有し、そこで生活を営んでいたのだった。彼は一人息子を失い、次いで妻を失った。²⁸

この作品の場合、直接話法を避けることが、主人公の観点をヴェールに包み、一種の近寄り難さを演出している。

他方、直接話法の多い物語は、戯曲の場合のように、物語の世界を登場人物の主観を通して見るため、物語の統一的把握は、読者自身が解釈によ

27 MAUPASSANT, G.: "Coco" (1884), *Maupassant, Contes et nouvelles*, Gallimard, 1974, pp.1149-1152.

28 高畑勲訳, *Op. Cit.*, pp.71-72.

って行かうことになる。たとえば、ベルナノスの「マダム・ダルジャン」では、死の床にあるマダム・ダルジャンが、夫に過去の罪を明かすのであるが、作品の大部分が直接話法であり、読者は登場人物の立場を考慮しつつその言葉を解釈しなければならない。

このように、直接話法は、登場人物の物語世界への主体的な関わりを明らかにし、読者を物語世界の延長上に置く一方で、作品の統一的把握を読者の解釈に委ねることになる。

「語り」から、直接話法への移行は、「」で示されるほか、「言う」、「思う」などの伝達動詞の存在、人称の変化（三人称から一、二人称へ）、そして、「語り」時制から「説明」時制への時制の変化によって標示される。間接話法も、登場人物の言葉、思索を表すが、その観点は、他の「語り」部分同様、物語の世界の外にある。時制的にも、人称的にも「語り」の観点が貫かれ、それが登場人物の思索、言葉であることは、伝達動詞が表示する。

物語には、語りの観点を保ちながら、登場人物の観点をも取り込む手法がある。自由間接話法である。

(10) Quand revinrent(単純過去) les froids, elle envisagea(単純過去), pour la première fois, le sombre avenir. Que ferait(条件法現在)-elle? Rien. Qu'arriverait(条件法現在)-il désormais pour elle? Rien. Quelle attente, quelle espérance pouvaient(半過去) ranimer son coeur? Aucune. Un médecin, consulté, avait déclaré(大過去) qu'elle n'aurait(条件法現在) jamais d'enfants. (MAUPASSANT, G.: Première neige, *Maupassant, Contes et nouvelles*, p.1098) (161-167/338)

寒さが再び訪れると、彼女は、はじめて暗い未来を直視した。どうしよう。どうしようもない。一体これから彼女に何が待ち受けているのだろうか。何もない。彼女の心を蘇らせるどんな期待や

希望がありうるというのだろう。全くない。診察を受けた医者は、彼女にはけっして子供は生まれないと宣告していた。

自由間接話法は、一旦登場人物の主観を通して見た世界をもう一度物語の外から捉え直す手法である。人称、時制は「語り」で、物語の他の部分と対立しない。また、そこには伝達動詞もない。ただ、描かれる内容だけが、登場人物の主観を一旦通し、それを再び外から見るという二重の観点を経たものになる。自由間接話法と通常の語りとの境界が曖昧な場合も少なくない。

語り手の思索と登場人物の思索の境界が曖昧になることもある。語り手が登場人物として物語に現れる場合（体験談など）、登場人物としての「私」の思索と語り手の思索は人称的な対立を生じない。したがって、この境界は時制の対立のみが標示することになる。つまり、語り手の思索は「説明」時制となり、登場人物の思索は「語り」時制となるのである。しかし、登場人物の思索も直接話法であれば「説明」時制で表される。そのような場合、例(11)のように、語り手の思索なのか、登場人物の「」のない直接話法なのかが曖昧になる。

(11) La ressemblance d'une figure oubliée depuis des années se dessinait (半過去) désormais avec une netteté singulière; c'était (半過去) un crayon estompé par le temps qui se faisait (半過去) peinture, comme ces vieux croquis de maîtres admirés dans un musée, dont on retrouve (現在) ailleurs l'original éblouissant.

Aimer une religieuse sous la forme d'une actrice!... et si c'était (半過去) la même! — Il y a (現在) de quoi devenir fou! c'est (現在) un entraînement fatal où l'inconnu vous attire (現在) comme le feu follet fuyant sur les joncs d'une eau morte... Reprenons (命令法) pied sur le réel.

Et Sylvie que j'**aimais** (半過去) tant, pourquoi l'**ai-je oubliée** (複合過去) depuis trois ans?... C'**était** (半過去) une bien jolie fille, et la plus belle de Loisy!

Elle **existe** (現在), elle, bonne et pure de coeur sans doute. Je **revois** (現在) sa fenêtre où le pampre **s'enlace** (現在) au rosier, la cage de fauvettes suspendue à gauche; j'**entends** (現在) le bruit de ses fuseaux sonores et sa chanson favorite:/.../

Elle m'**attend** (現在) encore... Qui l'**aurait épousée** (条件法過去)? Elle **est** (現在) si pauvre! (NERVAL, G.: *Op.Cit.*, pp.136-137) (203-221/1298)

もう何年も忘れていた一つの似かよった顔が、今や、ふしぎな鮮かさでうかびあがって来たのである。油絵のもとになっていたのは、歳月にはやけた一枚の鉛筆画だった。それはいわば、美術館で展覧されている大画家たちの古い下書きを見て、それからまた別な所で、けんらんたる油絵を前にし、あれがこの絵の下書きだったのだと気がつくのと似ている。

女優の姿の下で修道女を愛しているのだ!…そして、もしこれがまったく同一の女性だったとしたら!—そこには人の気を狂わさんばかりのものがある!何かえたいの知れぬものが、人をひきよせ、破壊へと導こうとしているのだ、まるでよどんだ水辺の燈心草の上を逃れて行く鬼火のように…。いけない、現実に立ち帰ろう。

それにしても、シルヴィ、あんなにも愛していたシルヴィを、私はどうして三年このかた忘れていたのだろうか?…とてもかわいい娘だった。ロワジーで一番の美しい娘だったのに!

そうだ、彼女がいるのだ。善良で、心も清く暮らしているはずだ。彼女の窓辺が目につかんでくる。葡萄の蔓が薔薇の蔓にからまり、左側にはおじろの籠が吊ってある。彼女の使っている響き

高い紡錘の音が聞こえる。彼女の好きな唄が聞こえてくる。/.../
シルヴィは私を今でも待っている……。だれが彼女を嫁にもらっ
たりするだろう？ 彼女は本当にかわいそうだ！²⁹

例(11)の最初の文は、「語り」時制で描かれている。これが、登場人物としての「私」の思索だからである。ところが、下線部からは、基本的に「説明」時制となり、一見語り手の思索のように見える。しかし、“Et Sylvie que j'**aimais** tant, pourquoi l'**ai-je oubliée** depuis trois ans?”（「それにしても、シルヴィ、あんなにも愛していたシルヴィを、私はどうして三年このかた忘れていたのだろう？」）の「三年間も」というのは、描かれている事態を後から見た時間ではなく、登場人物の「私」のいる時点からの時間的位置付けである。しかも、“Elle m'**attend** encore... Qui l'**aurait épousée**? Elle **est** si pauvre!”（「シルヴィは私を今でも待っている……。だれが彼女を嫁にもらったりするだろう？彼女は本当にかわいそうだ！」）という内容も、出来事を後になって振り返った語り手の観点からではなく、事態の渦中、すなわち、馬車に乗っている「私」の思索であろう。そのように考えると、この部分全体が登場人物の思索であり、直接話法で語られるべき内容と考えられる。しかし、形式的に「」や伝達動詞がなく、登場人物の「私」の言葉は語り手の言葉との境を明確に記されない。このことにより、一見語り手の思索のように見える内容が、物語の渦中にある登場人物である「私」の思索と重なり、あたかも、語り手が物語の中の登場人物として、今起こりつつある出来事を語っているかのような印象を与えるのである³⁰。このように「シルヴィ」は、語り手が自らの体験を過去のこ

29 入沢康夫訳, *Op. Cit.*, p.70.

30 このような場面は、この作品の別の場所にも認められる。

“Quelle triste route, la nuit, que cette route de Flandres, qui ne devient belle qu'en atteignant la zone des forêts!...” から “Pendant que la voiture monte les côtes, recomposons les souvenirs du temps où j'y venais si souvent.” まで。(NERVAL, G.: *Op. Cit.*, p.139) (256-262/1289)

「このフランドル街道は夜にはなんと陰気な道なのだろう、やっとましになるのは森林地帯にさしかかってからだ！」…「馬車が斜面を登っていく間に、よくあの田舎に行った頃の思い出をあらためて組みたててみることにしよう」(入沢康夫訳 *Op. Cit.*, p.71.)

ととして語りつつ、時折事態の渦中に入り込んで思索するような不思議な時間構成を持っている。そのような構成を生み出すのは、本来「説明」時制で描かれる語り手の思索と、登場人物の言葉が、「」や伝達動詞などの境界標示のない直接話法として時制の対立を生じないために、一時的に重なり合うからである。

IV. 様態を表す従属節

語りの文脈における「説明」時制のもう一つの現れは、様態を表す従属節における「説明」時制である。

(12) Je remarquai (単純過去) qu'en guise de bâton, il emportait (半過去) une tringle de fer grosse comme le pouce et longue d'environ un mètre cinquante. Je fis (単純過去) celui qui se promène (現在) en se reposant et je suivis (単純過去) une route parallèle à la sienne. (GIONO, J.: *Op. Cit.*, p.19) (115-119/416)

私は男が杖のかわりに鉄の棒を持っていることに気づいた。親指くらいの太さで、長さは1.5メートルほどだった。私はぶらぶらと散歩をしているふりをして、男の進む道と平行にあとをつけた。³¹

例(12)において、従属節中の現在時制は「ぶらぶらと散歩をしている人」が実際にいるのではなく、単にそのような歩き方、様態を表している。

(13) Tout heureux de l'aubaine, Hendriek Wersteeg s'en alla (単純過去) avec le gentleman, auquel, dans l'espoir de le lui vendre aussi, il fit (単純過去), en route, l'éloge de son singe, qui était (半過去), disait (半過去) -il, d'une race fort rare, une de celles dont

31 高畑勲訳, *Op. Cit.*, pp. 70-71.

les individus résistent (現在) le mieux au climat de l'Angleterre et qui s'attachent (現在) le plus à leur maître. (APOLLINAIRE, G.: *Le Matelot d'Amsterdam, Apollinaire Oeuvres en prose*, p.187) (32-37/183)

この思いがけない利得に、すっかり嬉しくなって、ヘンドリック・ウェルステッグは、紳士の後からついて行った。道みち、彼は、ついでにこれも買い取ってもらいたいと思って、紳士に向かって色々とお猿の効能を述べ立てた。その言う所に従えば、このお猿は、よく英国の気候に慣れ、深く飼い主になつく極めて稀な種類のものであると言うことであった。³²

例(13)でも、下線部の従属節はこの種の猿の性質、様態を表しているだけで、特定の猿の記述をしているわけではない。つまり、これらの現在時制は現在の出来事を記述しているのではなく、一つの可能的な様態を表しているにすぎない。同じ様な現象は、現在時制に限らず、複合過去や単純未来にも見られる。

(14) C'est ainsi que, sortant du théâtre avec l'amère tristesse que laisse (現在) un songe évanoui, j'allais (半過去) volontiers me joindre à la société d'un cercle où l'on soupait (半過去) en grand nombre, et où toute mélancolie cédait (半過去) devant la verve intarissable de quelques esprits éclatants, vifs, orageux, sublimes parfois, -tels qu'il s'en est trouvé (複合過去) toujours dans les époques de rénovation ou de décadence, et dont les discussions se haussaient (半過去) à ce point, que les plus timides d'entre nous allaient (半過去) voir parfois aux fenêtres si les Huns, les Turcomans ou les Cosaques n'arrivaient (半過去) pas enfin pour couper

32 堀口大学訳：「アムステルダムの水夫」、『思いがけない話』, p.230.

court à ces arguments de rhéteurs et de sophistes. (NERVAL, G.: *Op. Cit.*, p.130) (57-65/1298)

こんなふうにして、消え去った夢があとに残すあの苦い悲しみをいだいて劇場を出ると、私は好んであるクラブの会合の仲間入りしに出かけて行った。そこでは大勢で夜食をとるのがならわしだった。改革や退廃の時代にはつきものの、輝かしい、生き生きした、嵐のように猛々しく、そして時とすると崇高なまでに高揚する精神の持主たちが、尽きることのない弁舌をふるうのを聞いていると、どんなに憂鬱な気持も慰められるのだ。彼らの議論はしだいに高まって、仲間のうちでいちばん胆っ玉の小さい連中が、これではあげくはフン族やトルコマン族あるいはコサック族といった蛮族がやって来て、これらの雄弁家や詭弁家の議論を中断させるのではないかと心配になって、時々窓の所へのぞきに行くほどにまでなるのだった。³³

例(14)では、結果相を表す複合過去が同じように、様態を提示するのに用いられている。

(15) Au bout de très peu de temps une rumeur terrible comme celle qui annoncera (単純未来) aux hommes la fin du monde gronda (単純過去) jusque dans la salle du palais, fit (単純過去) trembler les oiseaux de rubis sur leurs grappes d'émeraude et secoua (単純過去) le roi Hugon dans son trône d'or. (FRANCE, A.: Gab d' Olivier, *Les contes de Jacques Tournebroche*, p.11) (189-192/280)

まもなく人々に世界の終末を告げるときのような恐ろしいうなりが宮殿の部屋にまでとどろき、エメラルドの房の上のルビーの鳥たちを震わせ、黄金の玉座のユゴン王を揺さぶった。

33 入沢康夫訳, *Op. Cit.*, p.66.

例(15)では、「うなり」une rumeur の様態を表す関係詞節において単純未来が同様の働きをしている。現在時制ではなく、単純未来が用いられているのは、その内容が可能性としても現在のものではなく、未来の可能性であるからであろう。

このような語りの文脈における現在時制の用法は、接続法の一つの用法と似ている。

(16) Je ne pouvais (半過去) même plus lire ni rien entreprendre qui nécessitât (接続法半過去) une attention soutenue. (GREEN. J.: Christine, *Oeuvres complètes I*, Gallimard, 1972, pp.7) (184-185/467)

本を読むこともできなくなり、絶えず注意をこらしていなければならぬような事は、何一つ企てられなくなっていた。³⁴

例(16)の関係詞節 (qui **nécessitât** une attention soutenue) はその場の事態を記述しているのではなく、一つの可能的な様態を提示しているにすぎない。接続法が、主節の直説法との対立から、事態が主節の表す時空とは異なる次元に属することを示すのである。これに対して、上のテキストにおいては、様態であることを示す語彙的な要素 (faire celui qui, une de celles dont, tels que, comme celle qui) と共に、「語り」時制に対する「説明」時制という対照がこのような次元の違いを示すのに役立っている。したがって、例(14)を例(14)'のように、現在を半過去に置き換えると語りの世界の事態を示すことになってしまうのである。

(14)' C'est ainsi que, sortant du théâtre avec l'amère tristesse que laissait (半過去) un songe évanoui, j'allais (半過去) volontiers me joindre à la société d'un cercle...

34 河村克己訳、『フランス短篇24』(渡辺一民編), 1980年, p.296.

こんなふうにして、消え去った夢があとに残したあの苦い悲しみをいだいて劇場を出ると、私は好んであるクラブの会合の仲間入りしにでかけて行った。

V. 聞き手への働きかけ

話者の介入する場合よりも、頻度は遥かに少ないが、物語の途中で、聞き手への働きかけが行われることがある。

(17) Troublée jusqu'au plus profond de moi-même, je rapprochai (単純過去) ma tête de la sienne, quand en face de moi je vis (単純過去), oui je le dis (現在) comme cela était, écoutez (命令法) -moi puisque je peux (現在) vous le dire, sur le balcon, devant la fenêtre, je vis (単純過去) ma mère qui me regardait (半過去) hébétée. (PROUST, M.: *Op. Cit.*, p.152) (432-439/465)

私は、底の底まで混乱しきって、彼の顔に自分の顔を近づけました。そのとき、私は正面に見たのです。そうです、あった通りに申しあげましょう。きいて下さい、私はありのままに言うことができるのですから。私は見たのです、バルコニーの上、窓の前で、呆然と私を凝視しているお母さまを。³⁵

命令法が表す「命令」という発話行為は、まさに、聞き手への直接の働きかけという発話態度によって遂行される。これと同様、「説明」時制(現在)も聞き手を巻き込む (je peux vous le dire) ことによって、「語り」の世界の外にいる話し手から聞き手への働きかけを表すのである。

例(18)では、単純未来がこの役割を果たしている。

(18) Vous me direz (単純未来): mais alors qu'est-ce qu'on buvait

35 鈴木道彦訳, *Op. Cit.*, p.150.

(半過去) à Plouhinec? Eh bien on y buvait(半過去) une boisson originale faite non avec des pommes, mais avec des poires, et appelée pour cela du poiré. (TOURNIER, M.: La légende du pain, Op. Cit., p.278) (17-19/114)

では、プルイネック村ではなにを飲んでいたのでか、と問われるか？リンゴから作らないで洋梨から作り、そのために梨酒と呼ばれる独自の飲み物を飲んでいたのである。³⁶

聞き手への働きかけは、二人称でなされるとは限らない。例(19)では、これが、禁止を表す非人称構文という形で行われている。

(19) Ils moururent(単純過去) tous. L'an d'après, il abandonna(単純過去) les érables pour reprendre les hêtres qui réussirent(単純過去) encore mieux que les chênes.

Pour avoir une idée à peu près exacte de ce caractère exceptionnel, il ne faut(現在) pas oublier qu' il s'exerçait(半過去) dans une solitude totale; si totale que, vers la fin de sa vie, il avait perdu(大過去) l'habitude de parler. (GIONO, J.: Op. Cit., pp.35-36) (276-281/416)

カエデは全滅した。翌年彼はカエデをあきらめ、ブナを植え直したが、これはナラよりさらにうまく育ったのだった。

この並外れた人物について、より正確な考えをもつには、彼が完全な孤独のなかで力を発揮したことを忘れてはならない。孤独はあまりにも完全だったので、生涯の終わり頃には、しゃべる習慣を失ってしまった。³⁷

36 榊原見三訳, *Op. Cit.*, p.34.

37 高畑勲訳, *Op. Cit.*, pp.75-76.

いずれの場合にも、聞き手は登場人物ではなく、「語り」の世界の外に位置する。「語り」時制は、話者や聴者の世界とは隔絶された世界を描くが、時折り、その世界から外へ出て、そこで描かれた出来事を聞き手に投げかけるのである。その働きかけが「説明」時制で行われるのは、話者と聴者の世界に関わる「説明」時制の本来の役割を果たしているに過ぎない。

VI. テキスト構成を表す要素：メタ・テキスト的要素

物語の内容とは関わりなく、その提示の方法、すなわちテキスト構成を表す要素は、「説明」時制に置かれ、物語の世界と区別される。我々の言語資料にも、次のような例が認められた。

①先行（または後続）テキストへの言及

(20) Certains de ces villages tristes dont j'ai parlé (複合過去) au début de mon récit s'étaient construits (大過去) sur les emplacements d'anciens villages gallo-romains dont il restait (半過去) encore des traces, (GIONO, J.: *Op. Cit.*, p.31) (248-250/416)

この物語の最初に話した侘しい村々のいくつかは、いまだにその痕跡をとどめるガロ＝ロマン時代の古い村の遺跡の上に建てられていた。³⁸

②引用

(21) Et chacune de ces fleurs s'évaporait (半過去) ainsi qu'un encensoir, comme l'a écrit (複合過去) le poète. (TOURNIER, M.: *La légende des parfums*, *Op. Cit.*, p.288) (35-36/144)

そして、それぞれの花は、詩人が書いたように、つり香炉みたい

38 高畑勲訳, *Op. Cit.*, p.74.

39 榊原見三訳, *Op. Cit.*, p.11.

に香りをまわりに漂わしていた。³⁹

③言い換え (パラフレーズ)

(22) Est (現在)-ce à dire que le pain vertébré fut (単純過去) définitivement oublié? (TOURNIER, M.: La légende du pain, *Op. Cit.*, p.281) (96-97/114)

では、脊椎を持ったパンは永久に忘れ去られたということなのだろうか?⁴⁰

(23) Ensuite Dieu créa (単純過去) l'homme. Et il le fit (単純過去) mâle et femelle, ce qui veut (現在) dire qu'il avait (半過去) des seins de femme et un sexe de garçon à la fois. (TOURNIER, M.: La légende de la musique et de la danse, *Op. Cit.*, p.283) (8-11/100)

つぎに、神は人間を創造したが、それは男であると同時に女である人間だった。つまり、女性の乳房を持っていながら男性のセックスをもっているという意味である。⁴¹

④強調構文

テキスト構成を表す要素の中で最も頻度の高いものは強調構文である。

(24) C'est (現在) à ce moment-là que je me souciai (単純過去) de l'âge de cet homme. (GIONO, J.: *Op. Cit.*, p.21) (159-160/416)

このときはじめて私は男の年齢が気になった。⁴²

(25) C'est (現在) Gérard de Roussillon qui fit (単純過去) le cin-

40 榑原晃三訳, *Op. Cit.*, p.40.

41 榑原晃三訳, *Op. Cit.*, p.23.

42 高畑勲訳, *Op. Cit.*, p.71.

quième gab. (FRANCE, A.: *Op. Cit.*, p.6) (51-52/280)

五番目にほらを吹いたのはジェラルール・ド・ルシヨンであった。

(26) Ils ne furent (単純過去) pas déçus, car c'est (現在) lui qui — à l'âge de cinq ans — suggéra (単純過去) à sa mère l'idée qui devait (半過去) imposer le pain vertébré. (TOURNIER, M.: *La légende du pain*, *Op. Cit.*, p.281) (103-106/114)

両親の期待は裏切られたりはしなかった。脊椎を持つパンを作るのに必要な考えを母親に暗示したのは、この五歳になる男の子だからである。⁴³

強調構文と形は似ていても、物語の内容に関するものは、「語り」時制で書かれている。下の例では、ceが上文の内容を指しており、強調構文にはなっていないので、単純過去が用いられている。

(27) La corbeille portée en cérémonie occupa (単純過去) le centre de la table, et chacun prit (単純過去) place, les plus favorisés auprès des jeunes filles: il suffisait (半過去) pour cela d'être connu de leurs parents. Ce fut (単純過去) la cause qui fit (単純過去) que je me retrouvai (単純過去) près de Sylvie. (NERVEL, G.: *Op. Cit.*, p.141) (296-301/1297)

うやうやしく俸持されて来た籠が食卓の中央に置かれ、人は各々の席に着いた。娘たちの傍にすわることができるのは恵まれた連中ということになるが、それにはその家族のだれかと知り合いでさえあればよかった。私がシルヴィの傍にすわることができたのもそのためだった。⁴⁴

43 榊原見三訳, *Op. Cit.*, p.40.

44 入沢康夫訳, *Op. Cit.*, p.72.

先行、後続テキストへの言及、引用、言い換え（パラフレーズ）、強調構文などは、すべて、テキストにおける他の要素の役割を表すという働きをするメタ・テキスト的要素である。物語の世界とこのメタ・テキスト的要素との境界が「語り」時制と「説明」時制の対立によって示されていると考えられる。

VII. 歴史的現在, 物語的現在

「語り」時制の文脈に「説明」時制が現れるもう一つの現象はいわゆる「歴史的現在」*présent historique*（「物語的現在」*présent de narration*, 「劇的現在」*présent dramatique*とも呼ばれている⁴⁵⁾）である。

(28) Le lendemain, à l'aube, la mère entendit (単純過去) quelqu'un traverser sa chambre en courant. Elle eut (単純過去) comme un pressentiment: «Jan, c'est toi?» Jan ne **répond** (現在) pas; il **est** (現在) déjà dans l'escalier. Vite, vite la mère **se lève** (現在): «Jan, où vas-tu?» Il **monte** (現在) au grenier; elle **monte** (現在) derrière lui: «Mon fils, au nom du Ciel!» Il **ferme** (現在) la porte et **tire** (現在) le verrou. «Jan, mon Janet, réponds-moi. Que vas-tu faire?» **A** tâtons, de ses vieilles mains qui **tremblent** (現在), elle **cherche** (現在) le loquet!... Une fenêtre qui **s'ouvre** (現在), le bruit d'un corps sur les dalles de la cour, et **c'est** (現在) tout... (DAUDET, A.: *Op. Cit.*, pp.67-68) (133-148/157)

翌日、明けがたに、母親はだれかが自分の部屋を走り抜けるのを聞いた。彼女はある予感に襲われた。—ジャン、ジャンじゃない？ジャンは答えなかった。もう階段のところにいる。急いで母親は起きあがった。—ジャン、どこへ行くの？ジャンは屋根裏に上った。母親もそのあとから上る。—おまえ、お願いだから！ジ

45 STEN, H.: *Les temps du verbe fini (indicatif) en Français Moderne*, København, 1952, pp.32-36.

ヤンは戸を閉めて、かんぬきをさした。

—ジャン、私のジャネ、返事をしておくれ。おまえ、どうしよう
というの？手探りで、老いた手を震わせながら、彼女は錠を捜す
……窓が開いて、庭の敷石の上に物の落ちた音がして…… それ
つきりだった……⁴⁶

「歴史的現在」は、直説法現在が過去の事柄を表す用法として広く知られている。しかし、これまでになされてきた考察は、もっぱら現在時制の潜在的価値という角度から、この時制が過去の出来事をも表しうることに注目している。F. ブリュノによれば、「現実感を与えるために、過去の行為をあたかも現在起こっているかのように提示することがある。」⁴⁷グレヴィスは、歴史的現在が過去時制（単純過去）から移行することが多いこと、また、現在が本質的な事柄を、半過去が副次的な事柄を表すことが多いことを指摘している⁴⁸。しかし、これらの記述だけでは、「歴史的現在」の特徴を十分に把握したとはいえない。このことから、「歴史的現在」と呼べる現象の把握に際してずれが生じている場合もある⁴⁹。重要なことは、「歴史的現在」の形式とその表現内容、そしてそれによって得られるテキスト上の効果を区別して記述することであろう。まず、「歴史的現在」の形式に関して、単に現在時制の潜在的価値と考えるだけでは不十分である。現在時制は単独で「歴史的現在」として働くわけではないからである。現在時制が「歴史的現在」として働くのには文脈が重要である。グレヴィスの指摘通り、「歴史的現在」は単純過去の後に現れることが多い。しかし、「歴史的現在」とは、個別の動詞に起こる現象ではない。一連の現在時制

46 桜田佐訳, *Op. Cit.*, p.51.

47 BRUNOT, F.: *Op. Cit.*, 1965, pp.478-479.

48 GREVISSE, M.: *Bon Usage*, Duculot, 1988, p.1289.

49 「歴史的現在」の定義が不十分であることから、「歴史的現在」と呼べる現象の範囲に関して誤解を生んでいる場合がある。S. Mellet は、「語り」時制のテキストに現れる現在時制をすべて「歴史的現在」と解し、これが必ずしも劇的な効果を生じないと主張している。(MELLET, S.: "Le présent "historique" ou "de narration", in *l'Information Grammaticale*, 4, pp.6-11, 1980.)

の動詞が一つのまとまりとなって、単純過去を中心とする「語り」時制の文脈に現れる。直前の動詞が単純過去であるか否かということよりも、現在時制の一連の動詞が現れるまでに、「語り」の世界が確立していることが重要なのである。そして、その表現内容は、「語り」世界と連続した、一つの場面を構成している。「歴史的現在」によって、「語り」時制から「説明」時制への移行が起こる場合、これまでに見た、話者の介入、一般的命題、直接話法、様態、聞き手への働きかけ、メタ・テキスト的要素などのような次元の転換はない。「歴史的現在」は「語り」時制で描かれて来た先行文脈と連続した「語り」世界を描くのである。また、「語り」時制のテキストでは、単純過去が前景を表し、背景は半過去によって表され、前景を浮き彫りにすることがヴァインリヒの研究で明らかになっているが⁵⁰、「歴史的現在」においては、先行文脈に存在した前景（単純過去）／背景（半過去）という対立は、形式的にも内容的にも存在しない。「歴史的現在」は専ら前景を描くのである⁵¹。「歴史的現在」の描く場面には、背景も説明もない。そこでは、「語り」の文脈において進行してきた出来事の筋が連続的に展開する。したがって、「歴史的現在」を構成する動詞は、主に変化を伴う動詞（行為、出来事）である。つまり、複数の現在時制の動詞が物語の筋だけを追って、一まとまりの場面を描くのである。

では、「歴史的現在」がテキストにもたらす効果はどのようなものであろうか。また、なぜその効果が得られるのであろうか。ブリュノに限らず、

50 ヴァインリヒ, H., *Op. Cit.*, pp.123-202.

51 この点において、「歴史的現在」は、物語の世界全体を重層的に構成する「語り」時制の世界／「説明」時制の世界という対立とは異なる。たとえば、「歴史的現在」の例に挙げた作品（「アルルの女」）の冒頭における「説明」時制の部分は、「語り」世界への導入であり、物語の背景描写でもあるので、「歴史的現在」とは区別される。

Pour aller au village, en descendant de mon moulin, on **passé** (現在) devant un mas bâti près de la route au fond d'une grande cour plantée de micocouliers. C'est (現在) la vraie maison du ménage de Provence. ... (DAUDET, A.: *Op. Cit.*, p.61).

風車小屋を下りて村へ行くには、えのきを植えた大きな庭の屋にあつて、道の近くに建っている「農家」の前を通る。…… いかにもプロヴァンスの地主の家らしい…… (桜田佐訳, *Op. Cit.*, p.46)

52 MELLET, S.: *Op. Cit.*, p.7.

53 註49参照。

「歴史的現在」が「劇的な」効果を発揮するというのが通説である⁵²。この点に異論を唱える研究もあるが⁵³、筆者は、通説の方に理があると考えられる。しかし、「劇的」な効果が得られる理由は、「過去の行為をあたかも現在起こっているかのように提示する」ということではない。単純過去を中心とする「語り」時制の文脈は、動詞が現れる度に、「語り」の世界が話者や聞き手の世界とは隔絶された世界であることを標示する。「歴史的現在」によって描かれる場面は、このようにして、先行文脈によって確立された約束事（すなわち、「語り」の世界と話者の世界の断絶）を前提にして、「語り」世界と連続的な出来事を描くが、現在時制の動詞は、この次元の違いを標示しないため、語られる世界と話者、聴者の世界との断絶が潜在化してしまうのである。「劇的」という言葉の本来の比喩はそのあり方をよく表している。単純過去中心の「語り」時制の世界を映画に喩えると、「歴史的現在」はまさに演劇に喩えられる。映画においては、すでに演じられてしまった物語が、スクリーンという次元で再現される。スクリーンと観客の世界との隔たりは、物語が再現されている間も消えることはない。しかし、演劇においては、演じられている世界と観客の世界は別の次元であるにもかかわらず、そのことは、単なる約束事として潜在しており、演じられている物語と観客の間には、目に見える垣根はないのである⁵⁴。これに加えて、「歴史的現在」の描く場面では、物語の前景のみが進行するために、演劇においても長々しいセリフが担うことがある「説明」や、舞台設定などの果たす「背景」が欠けている。つまり、「歴史的現在」は、説明も背景もない劇が展開するような効果を発揮するのである。したがって、テキスト全体から見ると、「語り」時制から「歴史的現在」

54 ケーテ・ハンブルガーは、ドイツ語を対照とした考察ではあるが、一人称報告のように語り手の設定された作品と、三人称小説や歴史記述のように語り手の存在しない作品における「歴史的現在」とを区別している。そして、三人称小説や歴史記述においては、過去は（話者の現在から見た）過去を表さないので、「物語的現在」は単純過去の文脈と対立しないと主張している。しかし、筆者は、「語り」時制の文脈と「歴史的現在」の対立は、時間軸におけるものではなく、物語の世界と観客の世界との垣根を標示するかしないかということにあるので、この二種類の場面には対立があると考えられる。（ハンブルガー、K:『文学の論理』、pp.79-87）

への移行は、映画が突如演劇に切り替わるようなものである。このような効果を「劇的」と呼ぶのは、この言葉の本来の意味においてもっとも適切であるといえる。

おわりに

以上我々は、「語り」時制中心に書かれた物語のなかで、「説明」時制がどのような役割を果たしているかを調べて来た。本稿では、特に、物語のどの部分に現れるかということとは関係なく、記述内容や前後の文脈との関係で、この時制対立が意味をもつ場合（マイクロ現象）を分析した。我々の資料の範囲において、その例を分類すると、語り手の介入、聞き手への働きかけなど、物語の外の世界が関与する場合、あるいは、具体的な時空に位置付けられない一般的命題や可能的様態の示されるとき、また、登場人物の観点へ移行するとき、テキストの構成を示すメタ・テキストの要素、物語の一部を劇的に呈示する「歴史的現在」などがあった。このことは、物語というジャンルの言語においては、「語り」時制から「説明」時制の交替が無意味に行われているわけではないことを示すのみならず、潜在的には、「語り」／「説明」というただ一つの対立が、物語というテキストのなかで、次元の異なるの様々な世界との関わりや、物語の呈示方法において多様な技法として生きていることを示すものである。

文献表

BENVENISTE, E.: "Les relations de temps dans le verbe français", *Problèmes de linguistique générale*, Gallimard, 1966, pp.237-250.

【一般言語学の諸問題】、川村正夫他訳、みすず書房、1966年。

BRUNOT, F.: *La pensée et la langue*, Masson et Cie, 1965.

GREVISSE, M.: *Bon Usage*, Duculot, 1969 et 1988.

ハンブルガー、K.: 『文学の論理』、植和田光晴訳、松籟社、1986年。

KAHN, F.: *Le système des temps de l'indicatif (chez un Parisien et chez une Bâloise)*,

Genève, Droz, 1954.

MAROUZEAU, J.: *Lexique de la terminologie linguistique (français—allemand—anglais—italien)*, Paris, Geuthner, 3e éd. (3e tirage), 1969.

MELLETT, S.: "Le présent "historique" ou "de narration", in *l'Information Grammaticale*, 4, pp.6-11, 1980.

中村勝利：「物語における『語り』の基本構造」, 名城大学人文紀要第20集, 1977年, pp.31-51。

西村淳子：「動詞時制から見たテキスト構成の手法—「説明」時制, 「語り」時制の分布と物語の全体構成—」, 武蔵大学人文学会雑誌, 第30巻, 第2・3号, 1999年。

REINHART, T.: *Principes de perception des formes et organisation temporelle des textes narratifs*, trad. P.Pica, *Recherches linguistiques de Vincennes*, 14-15, 1986, pp.45-92.

SERBAT, G.: "La place du présent de l'indicatif dans le système des temps", in *l'Information Grammaticale*, 7, 1980, pp.36-39.

—"Le prétendu "présent" et l'indicatif: une forme non déictique du verbe", in *l'Information Grammaticale*, 38, 1988, pp.32-35.

シュタンツェル, F.: 『物語の構造』, 前田彰一訳, 岩波書店, 1989年。

STEN, H.: *Les temps du verbe fini (indicatif) en Français Moderne*, København, 1952.

TOURATIER, C.: *Le système verbal français*, Armand Colin, 1996.

VASSANT, A.: "Ambigüités et mésaventures d'une théorie linguistique; Les relations de temps dans le verbe français d'E.Benveniste", in *l'Information Grammaticale*, 9, pp.13-19, 1981.

WEINRICH, H.: *Tempus*, Besprochene und erzählte Welt, W. Kohlhammer GmbH, 1971.

『時制論』, 脇阪豊, 大瀧敏夫, 竹島俊之, 原野昇訳, 紀伊國屋書店, 1982年。

Le Temps, Traduit par Michèle LACOSTE, Seuil, Paris, 1973.

分析作品

-APOLLINAIRE, Guillaume Apollinaire de Kostrowitsky: "Le Matelot d'Amsterdam" (1910), *Oeuvres complètes de Guillaume Apollinaire*, André Balland et Jacques Lecat, 1977, pp.187-190.

堀口大学訳：「アムステルダムの水夫」, 『思いがけない話』, 筑摩書房, 1988年, pp.227-237.

- BERNANOS, Georges: "Madame Dargent", *Bernanos IV*, Plon, La Palatine, pp.279-288.
三輪秀彦訳:「ダルジャン夫人」,『フランス短篇24』(渡辺一民編),
集英社, 1980年, pp.247-257.
- DAUDET, Alphonse: "L'Arlésienne", *Lettres de mon Moulin*, 1866, pp.61-68.
桜田佐訳,『風車小屋だより』, 岩波書店, 1974年, pp.46-52.
- FRANCE, Anatole: "Le Gab d'Olivier", *Les contes de Jacques Tournebroche*, Calmann-
Lévy 1921, pp.5-14.
- GIONO, Jean: *L'homme qui plantait des arbres* (1974), Gallimard, 1990.
高畑勲(訳著):『木を植えた男を読む』, 徳間書店, 1990年,
pp.65-112.
- GREEN, Julien: "Christine", *Oeuvres complètes I*, Gallimard, 1972, pp.1-12.
河村克己訳:『フランス短篇24』(渡辺一民編), 集英社, 1980年,
pp.292-301.
- LARBAUD, Valery: "Dolly", *Enfantines*, (1950) Gallimard, 1979, pp.87-96.
- MAUPASSANT, Henri René Albert Guy de: "Première neige", (1883), *Maupassant*,
Contes et nouvelles, Gallimard, 1974, pp.1094-1102.
— "Coco" (1884), *Maupassant, Contes et nouvelles*, Gallimard, 1974,
pp.1149-1152.
- NERVAL, Gérard de: "Sylvie", *Les filles du feu*, Slatkine, 1979, pp.127-195.
入沢康夫訳:「シルヴィ」,『フランス短篇24』(渡辺一民編), 集英
社, 1980年, pp.63-96.
- PROUST, Marcel: "La confession d'une jeune fille", *Les plaisirs et les jours*, Galli-
mard, 1924, pp.136-153.
鈴木道彦訳:「乙女の告白」,『フランス短篇24』(渡辺一民編), 集
英社, 1980年, pp.139-150.
- SAINT-EXUPERY, Antoine de: *Le Petit Prince*, Gallimard, 1970.
- TOURNIER, Michel: "La légende du pain", *Le médianoche amoureux*, Gallimard, 1989,
pp.277-282.
"La légende de la musique et de la danse", *Le médianoche amoureux*,
Gallimard, 1989, pp.283-286.
"La légende des parfums", *Le médianoche amoureux*, Gallimard, 1989,
pp.287-293.
"La légende de la peinture", *Le médianoche amoureux*, Gallimard, 1989,
pp.294-298.
榎原晃三訳:『愛を語る夜の宴』, 福武書店, 1992年.

(1999年6月24日 受理)